

講演会

「柏木宏之の世界―桜井駅跡

『正成・正行親子の別れ』朗読会」

平成 24 年 5 月 12 日（土）

毎日放送アナウンサー 柏木 宏之 氏



さあ、時でございます。時代は鎌倉幕府、執権の北条高時の頃でございます。この高時が闘犬が大好きで、お酒が大好きで、遊んでばかりでありました。しかし、朝廷の天皇の位は、大覚寺統と持明院統という両統迭立時代でございます。鎌倉幕府が 10 年ごとに順番にやれと決めるんですね。ところが、30 過ぎてやっと天皇になった後醍醐天皇は、何でそんなこと聞かなあかんねや、天皇って言うのは一番えらいんちゃうんかい、と腹に据えかねてくるわけでございます。いよいよ次の天皇に譲らんかという時に、後醍醐天皇の周辺に集まった若い公卿達が、鎌倉幕府をひっくり返してしまえ、六波羅探題を明日攻撃！という晩に裏切り者が出てくる。その企みは潰される。「正中の変」でございます。

さあ、『太平記』という軍記物はよくできた話でございましてね。『平家物語』なんかは「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」って琵琶で語ったりして仏教説話から始まります。『太平記』、そんなないんです。なぜかと申しますと、これはリアルタイムに書き綴られた作品だからです。つまり、私がなぜ興味を持ったかと言うと、私がやっている放送の仕事っていうのはまさにこういうことなんです。今何が起こっています。今、というものを記録していった、これが『太平記』であるというふうに読むと非常におもしろいものだと私は思うんでございます。その中に楠木正成という大スターが登場する。鎌倉幕府の御家人ではなく、地方の土豪、自分たちで武力を持って商売をしたりしている人たちですね、これは鎌倉幕府の統制下にありませんので、悪党というふうに言われた。そういう地方武士団の棟梁でございまして、前半生は全くの不明です。楠木正成が登場するのは、37 歳位じゃなかったかと。後醍醐天皇、吉野への逃避行中、笠置山におわす時に、登場するのでございます。

さあ、それでは私の想像する、柏木宏之の世界、『太平記』「桜井の別れ」を中心にお話しいたします。事の起こりから、朗読をさせていただきます。お聞きくださいませ。

正季「兄貴、えらいこっちゃ。天皇さんが、鎌倉を潰せ、ちゅうて命令を出しはったらしいで。ほんで、怒った鎌倉から、なんやごついぎょうさん軍団がやって来て、天皇さんが都を逃げはったそうやなあ。」

正成「そうらしいな。いや、まあ、わしらとしては河内の村でな、今まで通り平和に暮らしたら、一番ええのんや。それにわしも、鎌倉幕府とかいうのんはどやねんと思うてな。まあ、いっぺん天皇さんが考えてはるような平和な世の中がやって来るんやったら、それに賭けてみようかな、とは思うとる。実はな、今、天皇さんがその笠置山に来たはんのや。わしらに力を貸してくれって来たはんのや。」

この後、目のさめるような、千早・赤坂城での戦いがあり、そして、名和長年という人が、隠岐島に流されていた後醍醐天皇を連れて都へ帰ります。「建武の新政」がいよいよ始まります。

ところが、それまで天下を取っていた武士達の所領を全部、朝廷が巻き上げて、お寺・神社・公家とかが所領を持つわけですね。足利尊氏は、この戦に勝って鎌倉幕府を倒したら、足利幕府を作るつもりで、恩賞としてお前にはここの土地をやる、という空手形をいっぱい打っております。ところがそうはいかなかった。そこで武士の面目丸つぶれ。足利尊氏、怒りまして、遂に鎌倉の方に行った、そこで謀反を起こすわけでございます。さあ、いよいよ足利勢が京都へ攻めのぼってきます。しかし、正成の策略で、足利軍は食料を断たれて、都落ちして、西へ西へと逃げてまいります。

でも、源氏長者・足利尊氏というこの肩書、名前がやっぱり人気の元なんですね。九州、中国路から京都を指して、尊氏は船で瀬戸内へ、弟、直義は陸路で土豪を糾合しながら、どんどん膨れ上がる大軍団でやって来た。それが今の神戸の湊川、あのへんでございます。さあ、朝廷は大騒ぎ。その時に正成が一つ提案をする。「御上には誠に申し訳ありませんが、ようやく復興になってきた京の街でございますが、叡山にお戻り下さい。今度は前よりもっと大きな網を広げて、足利勢を包み込んでしまいます。」もうそれはね、今の我々が聞いてもびっくりするぐらい大きな戦略です。しかし、建武の新政で自分たちの所領を取り返した貴族たちは京都を離れたくないのでございます。いろんな難癖をつけます。新田勢には神戸の浜へ行って上陸する前に水際作戦でやっつけてしまえと命令をします。

さあ、いよいよでございます。正成、正行、この二人が別れにかかるわけでございます。

桜井の駅でございます。

正成「皆集まったか。ここでうちのもんを二手に分ける。正行、お前はこっちを連れて河内へ帰れ。」

正行「なんで。このまま、おトンは、尊氏と合戦するんやろ。わいも行くで。」

正成「あのな、正行、獅子は生まれて三日目に、子供を谷底に突き落とすと言うな。そして険しい崖を這い上がって来た子だけに乳をやるという。わしはお前をここで谷底へ突き落とさならん。ええか、お前はわしに代わって楠木党の棟梁にならなあかんのやで。そのためには、ええか、和田やんとか恩地、湯浅、八尾の言うことをよう聞いて、河内の里を守らなあかん。力をつけて、わしの志を継いでくれと言うとんのや。お前ならできると思うから、河内へ向かえと言うとんねん。…正行、泣かんでもええぞ。」

正行「泣いてんのんちゃう。おトンの、いや大将の気持ちがよくわかったんや。」

というのが、私の中の桜井の別れでございます。でこの後、湊川やあの辺行くわけでございます。新田の大將は囲まれてしまいます。新田勢がここで全部潰れてしまうと、これは京都を守る武將がいなくなるわけでございます。楠木正成はこの時700の手勢で、足利軍を引き付けて、その間に新田軍を逃がす。この後、尊氏は、正成の首を取って、首をさらしはするんですけども、当時はね、塩漬けにするんですね、腐らないように。塩漬けにした首を河内の正行の元に送ります。これは丁重に葬って差し上げよと。父上はよく戦われたという意味なんですよ。さあこの後、正行は父の遺訓を守りまして、四条畷で大合戦をし、命を落としていくわけでございます。正行さんの四条畷神社があそこにありますんでね。湊川神社、行かはるんやったら、一度は四条畷神社に行って、この桜井で間違いなく親子の別れをした親子を偲んでみてはいかがかなと私は思うわけでございます。

今日は大変長いことお付き合いいただきまして、誠にありがとうございました。本日はこれまででございます。